

アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国語大学

要覧 1999



目 次

概 要

歴史と性格	1
組 織	3
研究組織構成	4
職 員	6
運営委員・専門委員	8
歳 出	9

研究活動

共同研究プロジェクト	10
卓越した研究拠点(COE)	25
情報資源利用研究センター	26
国際学術交流	28
長期研究者派遣	31
短期共同研究員(公募)・大学院・研究生	32
言語研修	33

施 設

電算機室・情報資源利用研究センター	34
図 書 室	35
音声学実験室	36

表紙写真説明

エルヤース家の女性たち

ベルセポリスの北方、ダリウス大王以下のアケメネス朝の諸王が営んだ、壮大な墓所があるナグセ・ロスタムを左手に回り込み、車で10分ほど走ると、岩山を背にしたレザーバード・シュール村がある。この村の、エルヤース家の女性たち。1996年秋、たまたま結婚式に出向く一家がミニバスを待っているところに行き会い、写真を撮らせてもらった。翌年冬、そのときの写真を持参した。今回が3度目の出会いである。すでに知り合いになっているせいか、姑(左)と嫁(中央、花嫁衣装を着て登場)、それにたまたま里帰りしていた小姑が、自分たちの芋主そっちのけて、女性たちだけの写真を撮れとポーズをとった。

(1999年3月、イランのファールス州にて。上岡弘二)

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES
4, NISHIGAHARA, KITAKU, TOKYO 114-8580

TEL:03-3910-9147

FAX:03-5974-3838

歴史と性格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、我が国ではじめての共同利用研究所です。共同利用研究所の使命は、全国の研究機関に所属する専門の研究者のために設備や資料を提供し、研究交流の機会をつくり、それによって研究の進展を促すことです。

戦後の復興が進むなかで、日本の運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに、1961(昭和36)年に日本学会会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設置するように勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、1964(昭和39)年4月1日、本研究所は東京外国語大学附置の全国共同利用研究所として発足しました。本研究所の設置目的は、次のようにまとめられています。

- 1) アジア・アフリカの諸言語の研究、およびそれらを通じて、アジア・アフリカ諸地域の歴史・社会・文化を直接研究すること
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典をつくること
- 3) それらの言語修得を助けるため、言語研修を実施すること

以来、30年以上を経過して、本研究所を取り巻く諸事情は大きく変わりました。学界では、人文・社会科学の分野で、言語学・歴史学・人類学などのような、すでに確立している学問体系に依存した個別的な研究分野をのり越えた新しい学問・理論構築への要請が高まってきました。それは近年における国際化、地域の枠組みの流動化、民族・宗教問題の激化、都市化現象の進展などの急激な世界情勢の変化、および、狭い地域の枠組みにとられない広域な視野からの研究の必要性に対する認識の深まりなどと関連しています。他方、最近における情報処理技術の発達をなかで、文字のみならず音声や画像の処理が可能になり、さらに、これらを個別の情報としてではなくひとつの情報ネットワークに統合化する研究が急速に進展してきています。

このような学問的・社会的要請、アジア・アフリカ地域の社会情勢の変化、科学技術の発達に対応して、本研究所は1991(平成3)年度に、研究体制の抜本的見直しをおこない、従来の16小部門・1客員部門(外国人)を、4大研究部門・1客員部門(外国人)に再編成しました。4大研究部門では、言語を媒介として成立している文化を総合的に研究する学問である「言語文化学」理論の構築、広域的なフィールドワークや共同研究の実施、情

報の統合的処理のための理論と方法の開発などをめざしています。

また、東京外国語大学に1992(平成4)年度に新たに設置された大学院地域文化研究科博士後期課程を全面的にバックアップするために、多くの教官が参加し、教育活動にも力を注ぎはじめています。1995(平成7)年度からは、卓越した研究拠点(COE)の形成にかかわる「中核的研究機関支援プログラム」が発足したのに伴い、本研究所はその対象機関に指名され、従来にもまして、アジア・アフリカ地域の言語文化研究において先導的役割を果たすことになりました。

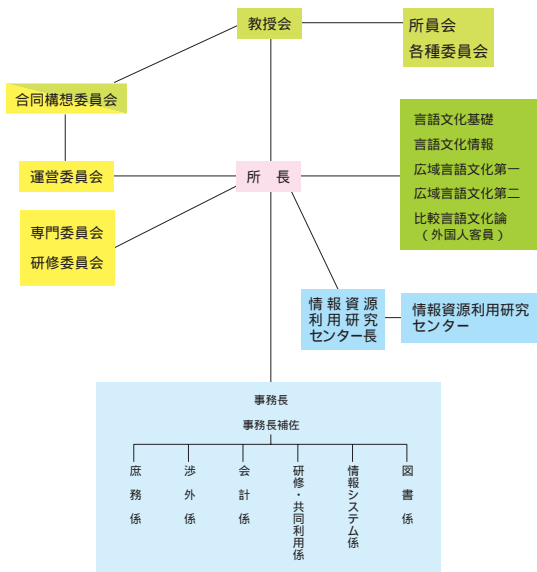
さらに冷戦構造崩壊後の流動する世界情勢と情報ネットワーク化のめざましい技術革新にすみやかに対応するため、1997(平成9)年度より附属「情報資源利用研究センター」を設置し、共同利用研究所としてのさらなる発展をめざしています。

以上の活動を充実させ、我が国における言語文化研究の発展に貢献することが、本研究所の責務であり、所員一同の願いでもあります。

歴代所長

岡 正 雄	1964-1972年
徳 永 康 元	1972-1974年
北 村 甫	1974-1983年
梅 田 博 之	1983-1989年
山 口 昌 男	1989-1991年
上 岡 弘 二	1991-1995年
池 端 雪 浦	1995-1997年
石 井 溥	1997年-現在

組 織



(1999年4月1日現在)

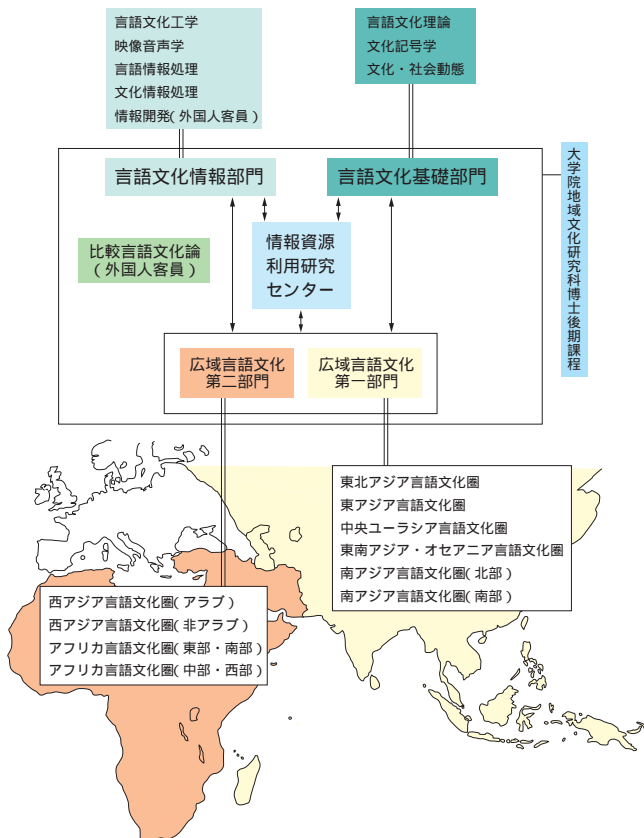
区分	教授	助教授	講師	助手	その他の職員	計
定員	(5) 19	18	0	6	26	(5) 69

()は外国人客員数を外数で示す

研究組織構成

部門名	研究分野	研究内容	所属研究者
言語文化基礎	言語文化理論, 文化記号学, 文化・社会動態	言語文化学の構築を図るためにアジア・アフリカの言語文化を比較・分析し, 歴史学, 文化人類学, 言語学など関連諸研究分野の成果を統合して理論化する。	町田(センター長/兼任), 松下, 家島 飯塚, 真島, 峰岸 吳人
言語文化情報	言語文化工学, 映像音声学, 言語情報処理, 文化情報処理, 情報開発(外国人研究員)	アジア・アフリカの言語文化情報の分析・処理と新しい情報処理システムの構築, および情報処理した言語文化情報の提供, 共同利用・公開のための手法を開発する。	加賀谷, 中嶋, 中見, バースカララオ 小田, 高島, 深澤 菊澤, 本田 Prakya Stree Saila Subrahmanyam(外国人研究員)
広域言語文化 第一	東北アジア, 東アジア, 中央ユーラシア, 東南アジア・オセアニア, 南アジア(北部), 南アジア(南部)の各言語文化圏	東は沿海州より西はフィンランドあるいはインド亜大陸までを対象とする。人, 物, 情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」部門との連携で分析する。	池端, 石井(所長/兼任), 新谷, ダニエルス, 内藤, 宮崎 粟原, 西井, 根本, 森 澤田, 塩原, 床呂
広域言語文化 第二	西アジア(アラブ), 西アジア(非アラブ), アフリカ(東部・南部), アフリカ(西部・中部)の各言語文化圏	西アジア, アフリカ言語文化圏を対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」部門との連携で分析する。	内堀, 小川, 梶, 上岡 黒木, 高知尾, 永原, 羽田 星
比較言語文化論 (外国人研究員 *COE分)		言語文化学の確立を図るために, 外国人研究者(特にアジア・アフリカ諸国)を客員教授として招へいし, 共同研究を推進する。	Mohammad-Reza Nasiri, 史 金波, 策 文清, *Didier Louis Nadia Goyvaerts
情報資源利用研究センター		アジア・アフリカ言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と, それを活用した共同研究手法の開発・国際学術交流を推進する。	芝野 新免, 豊島, 三尾 吉澤 Lawrence Andrew Reid (外国人研究員)

動態的なアジア・アフリカ言語文化学の構築をめざす研究組織構成図



所長（併任）教授 石 井 溥

研 究 部

教 授

- | | |
|--|---|
| 池 端 雪 浦：フィリピン近・現代史 | クリスチャン・ダニエルズ：16-20世紀中国史における
社会，経済および技術 |
| 石 井 溥：南アジアの人類学 | |
| 内 堀 基 光：東南アジア（マダガスカルを含む）
民族学，宗教学人類学 | 内 藤 雅 雄：インド近・現代史 |
| 小 川 了：国家とインフォーマルエコノミー
（アフリカ） | 中 嶋 幹 起：東アジアの諸言語 |
| 加賀谷良平：音響音声学，アフリカ諸言語 | 中 見 立 夫：内陸・東アジアの国際関係史 |
| 梶 茂 樹：バンツール諸語，言語人類学 | ペーリ・バースカララオ：南アジア諸言語，音声学 |
| 上 岡 弘 二：イラン諸語，イスラームの民間信
仰 | 町 田 和 彦：ヒンディー語 |
| 芝 野 耕 司：マルチメディア・データベース論，
多言語処理論 | 松 下 周 二：アフリカの言語 |
| 新 谷 忠 彦：言語哲学 | 宮 崎 恒 二：オーストロネシア諸社会の研究 |
| | 家 島 彦 一：インド洋・地中海の海域史に關する
基礎的研究 |

助 教 授

- | | |
|----------------------|--|
| 飯 塚 正 人：イスラーム学 | 根 本 敬：ビルマ近・現代史 |
| 小 田 淳 一：計量文献学 | 羽 田 亨 一：サファビー朝文化史研究 |
| 栗 原 浩 英：ヴェトナム現代史 | 深 澤 秀 夫：マダガスカルを中心とするインド
洋海域世界の社会人類学 |
| 黒 木 英 充：東アラブ近・現代史 | 真 島 一 郎：西アフリカの人類学，フランス帝
国主義史，情報社会学 |
| 新 免 康：中央アジア近・現代史 | 三 尾 裕 子：東アジアの人類学 |
| 高 島 淳：言語情報処理，ヒンドゥー教 | 峰 岸 真 琴：オーストロアジア諸言語 |
| 高 知 尾 仁：世界表象と象徴性 | 森 幹 男：インドシナ比較文化史 |
| 豊 島 正 之：中世日本語文献学 | |
| 永 原 陽 子：南部アフリカの歴史 | |
| 西 井 凉 子：東南アジアのエスニシティ | |

助 手

- | | |
|--------------------------------|----------------------|
| 菊 澤 律 子：オーストロネシア諸言語 | 床 呂 郁 哉：東南アジア島嶼部の人類学 |
| 呉 人 徳 司：言語学，チュクチ語 | 星 泉：チベット語 |
| 澤 田 英 夫：ビルマ語・カチン系民族言語の文
法体系 | 本 田 洋：韓国・朝鮮の人類学 |
| 塩 原 朝 子：インドネシア諸語 | 吉 澤 誠 一 郎：中国近・現代史 |

事務部

事務長 石毛健夫
事務長補佐 枝 丈雄

庶務係	会計係	情報システム係
係長 仲 勝司	係長 渡部博和	係長 今井健二
文部事務官 馬 真光	主任 石鍋誠子	主任 丹羽弘行
文部事務官 福田華恵	主任 近藤晴彦	文部事務官 萩原啓一
渉外係	研修・共同利用係	図書係
係長 佐藤静子	係長 石橋徳三郎	係長 伊藤宜司
文部事務官 岡田健一	主任 涌井 隆	主任 須郷知子
文部事務官 木村智子	文部事務官 田部井直美	主任 西浦数雄
		文部事務官 磯山 勉
		文部事務官 吉田恵理



誕生の清め

ネワールの高カーストであるシェシヨの男の子の誕生約1週間後に行われた、「マツァ・プー・ベンケグ（誕生の清め）」の儀礼。ここでは、3階ペランダで母親が赤ん坊の体に菜種油を塗って清めている。この後、屋内で一族の人々が神礼拝とともに赤ん坊に掛け物を与え、終了時には、家族が戸口で付近の人々に食物の布施を行う。

（ネパール、カトマンズ盆地の村で。1997年3月9日。石井博）

運営委員・専門委員

運 営 委 員

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会においておこなわれますが、共同利用研究所としての本来の機能を適切に遂行するため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に応えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第18期(1999.2-2001.1)の運営委員は現在以下のとおりです。

飯塚正人	所員	田中敏雄	東京外国語大学教授
石井米雄	神田外語大学長 (京都大学名誉教授)	谷泰	大谷大学教授
池端雪浦	所員	土田滋	順益台湾原住民博物館長
梅田博之	麗澤大学教授 (東京外国語大学名誉教授)	橋本勝	大阪外国語大学教授
應地利明	京都大学教授	町田和彦	所員
小川了	所員	間野英二	京都大学教授
久馬一剛	滋賀県立大学教授 (京都大学名誉教授)	三尾裕子	所員
古賀正則	明治大学教授	三谷恭之	東京外国語大学教授
齋藤信男	慶応義塾大学教授	峰岸真琴	所員
斯波義信	国際基督教大学教授	宮岡伯人	京都大学教授
末成道男	東洋大学教授	宮崎恒二	所員
田中二郎	京都大学教授	宮本正興	大阪外国語大学教授

専 門 委 員

所長の諮問に応えて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会があり、委員は所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1999年度の委員は以下のとおりです。

研 修 委 員 会

梅田博之	麗澤大学教授 (東京外国語大学名誉教授)	富盛伸夫	東京外国語大学教授
大江孝男	東京外国語大学名誉教授	橋本勝	大阪外国語大学教授
大東百合子	津田塾大学名誉教授	三谷恭之	東京外国語大学教授
小澤重男	東京外国語大学名誉教授	宮岡伯人	京都大学教授
柴田紀男	天理大学教授	宮本正興	大阪外国語大学教授

国立学校特別会計

(単位：千円)

区 分	平成8年度		平成9年度		平成10年度	
	件数(件)	金額	件数(件)	金額	件数(件)	金額
(項) 研究所		863,070		907,919		946,149
人件費		624,841		641,364		661,809
物件費		238,229		266,555		284,340
(項) 施設整備費				59,500		37,715
計		863,070		967,419		983,864

科学研究費補助金受入状況

(単位：千円)

区 分	平成8年度		平成9年度		平成10年度	
	件数(件)	金額	件数(件)	金額	件数(件)	金額
国際学術研究	6	56,000	4	38,170	6	59,900
基盤研究(A)	1	2,300	1	4,600		
基盤研究(B)	2	4,500	1	900	1	1,000
基盤研究(C)	1	1,100	3	4,600	2	2,400
奨励研究(A)	2	1,800	1	1,400	2	1,900
計	12	65,700	10	49,670	11	65,200

奨学寄附金受入状況

(単位：千円)

区 分	平成8年度		平成9年度		平成10年度	
	件数(件)	金額	件数(件)	金額	件数(件)	金額
奨学寄附金	2	5,440	2	3,510	2	3,367

共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、約400点におよぶ出版物をはじめとして多様な研究成果をあげています。

また、1996年度からは、限られた予算のなかで、従来の研究分野を越えた斬新な共同研究を推進するため、新たに重点プロジェクトというカテゴリーが設けられました。最初の重点プロジェクトとして「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」が組織され、国際シンポジウムをおこなうなど、活発な研究活動が展開されてきました。1997年度には、さらに「音韻に関する通言語的研究」プロジェクトが加わりました。

本年度おこなわれるプロジェクトは次のとおりです。

重点共同研究プロジェクト

音韻に関する通言語的研究

(主査：梶 茂樹 / 所員15, 共同研究員36)

言語学の本来の研究分野は、音韻、形態、統語、意味であるが、そのなかでも音韻論は、長らく他の研究分野をリードしてきた。本プロジェクトは、音韻論のなかでも声調 (tone) を中心とする超分節素 (suprasegmentals) の研究をおこなう。

世界に、声調言語は意外と多い。中国語諸方言やチベット・ビルマ系諸語、またベトナム語、タイ語などの東南アジア諸語、バンツ系やクワ系などのニジェール・コンゴ諸語、マサイ語やナンディ語などのナイル系諸語、南部アフリカのコイ・サン諸語、またアフロ・アジア系の中でもチャディク諸語、さらにはニューカレドニア諸語やアメリカ・インディアン諸語など。また、日本語やインド・ヨーロッパ系のスウェーデン語やセルボ・クロアチア語などのピッチ・アクセント諸語の研究も重要である。

具体的な研究テーマとしては、声調、音調、アクセントなどの用語の整理と同時に、次のようなものが考えられる。

声調(正確にはピッチ)の音声学的特性	声調言語とアクセント言語との違い
子音、母音といった分節素	世界の声調言語のタイポロジー
個々の言語における声調の体系	声調の通時的変化と比較研究
声調の語彙的、文法的機能	声調の発生と消滅

池田 巧	生駒美喜	伊藤英人	岩田 礼	上田広美
宇佐美洋	上野善道	遠藤光暁	大江孝男	加藤昌彦
久保智之	窪園晴夫	熊本 裕	坂本恭章	清水克正
清水政明	鈴木玲子	壇辻正剛	角田太作	中井幸比古
中野暁雄	長野泰彦	新田哲夫	西 義郎	林 徹

早田輝洋 原口庄輔 平山久雄 福井 玲 堀 博文
松村一登 松森晶子 箕浦信勝 藪 司郎 湯川恭敏
SMITH, Donna M Erickson

一般共同研究プロジェクト

言語文化接触に関する研究

(主査：中嶋幹起 / 所員5, 共同研究員28)

東アジアに共生する幾多の民族の言語は、多様性に富み、その長い歴史と相まって、多くの言語資料が集積されている。さらに、近年は、中国やロシアなどの開放政策により、文献資料や学術成果もつぎつぎに公にされつつある。

本プロジェクトは、朝鮮語、満州語、モンゴル語、エベンキ語、漢語、ウイグル語、チベット語、苗語、西夏語、白語などの言語研究者が現地調査での成果を報告し、それぞれの研究について、言語学のみならず、文化人類学、歴史学などの分野を含めた多角的かつ広域的視点から討論をおこないつつ、言語のダイナミックスを探ろうとするものである。

本年度は、目下構築中の西夏語に加えて契丹文字に関するデータベースを中心に研究を進める予定である。

伊藤英人	鶴殿倫次	大江孝男	太田 斎	大瀧幸子
大塚秀明	菅野裕臣	岸田文隆	喜多田久仁彦	北浦 甫
慶谷壽信	坂本恭章	佐々木猛	佐藤 進	佐藤晴彦
高田時雄	津曲敏郎	丁 鋒	富平美波	中川千枝子
西 義郎	花登正宏	樋口康一	藤本幸夫	星実千代
細谷良夫	前川捷三	村上嘉英		

旅と表象の比較研究

(主査：高知尾 仁 / 所員5, 共同研究員11)

本プロジェクトは、他者との出会いを提示し、他者の言表と他者世界が表象するものを解釈し、他者文化の持つ多様な意味を構成する旅のディスコースを主要な対象とする。その際、他者言説を生むコンテキストや、他者の自己(自己文化)との距離・差異の構築や、他者表象が持つ価値評価などが問題となると思われる。他者が直接的に語られるという前提への疑問と、他者表象のバイアスと他者についてのディスコースそれ自体が充分に見つめられなかったことへの反省として、近年欧米で飛躍的に研究が進められている旅行記研究に対応して、ここでは、近代ヨーロッパ(ルネサンス以降)の旅のテキストとそのほかの文化の旅のテキストを取り上げるとともに、他者についての多種多様な表象形態や、それに関連した諸理念(例えば、秩序、正義、正統、コスモス)の表象化についても研究の対象とする。従って、本プロジェクトでは、旅論・表象論・他者論とそれらの交差する領域が取り扱われることとなる。このような比較研究によって、エクリチュールを有する文化による、他者と他者のいる場所と時間の配置・配列が明らかにされ、またその文化と他者との関係性(例えば、理想、調和、幻想、混乱、絶望、排除)を提示するディスコース

が明らかにされるものと期待される。またさらには、他者に対比された自己（自己文化）のアイデンティティの提示の実体や、文化の普遍性や近代というディスクリールについても考察されることが期待される。

浅井雅志 荒木正純 彌永信美 金森修 齋藤晃
重松伸司 田中純男 難波美和子 西尾哲夫 原毅彦
渡辺公三

言語文化データベースの研究とCAI開発（主査：峰岸真琴/所員5，共同研究員11）

本プロジェクトの目的は、アジア・アフリカの言語文化を中心とした情報をデータベース化するための研究と、それを利用して言語文化教育のためのCAI教材を開発することにある。

アジア・アフリカの言語の大部分は、「特殊な」言語と見なされ、極めて限られた学習の機会しかないのが現状である。また、その話されている地理的、文化的な環境を理解するには、言葉による説明よりも、写真や映像にしたものを見たほうが理解が早いものもたくさんある。そのためには画像、映像資料を収集、蓄積し、それを構造化して、いつでも利用可能なデータベースにしておかなければならない。また、それらを有機的に結合して、教育用のCAIソフトを開発するには、一定のノウハウの蓄積が必要である。

本プロジェクトでは、アジア・アフリカ地域の言語と、その文化的環境を対象にして、

CAI開発の資料となる言語・文化情報資料のデータベース化の理論的研究

実際のCAIのプラットフォームとなるハードウェア構成の検討

現実に稼働しているCAI設備の見学、研究

CAIシステムの製作とその発表、評価

効果的なプレゼンテーション、ユーザーインターフェースの研究

をおこない、実用的な言語文化に関する自動化研修システムの製作と運用をめざす。

上田美紀 上村隆一 小川英文 加納千恵子 小森早江子
武井直紀 陳文芷 寺朱美 深尾百合子 益子幸江
山元啓史

シャン文化圏に関する総合的研究（主査：新谷忠彦/所員4，共同研究員9）

本プロジェクトは、以下の目的をもって共同研究をおこない、必要に応じて研究会を開き、その成果を資料集・論文集として出版する。

ひとつの複合文化交流圏（シャン文化圏）の解明のための方法論の検討

シャン文化圏に関する情報収集と現地調査のための準備

現地調査の報告と成果の検討

シャン系言語の学習と習得

文献資料および非文献資料の解読・整理

基本的文献資料の解説出版

今年度は特に、海外調査の成果に基づく研究発表、及び、シャン語の歴史的文献の解読研究の二点に重点を置いて研究を進める。

飯島 明子 石井 米雄 宇佐 美洋 加藤 昌彦 加藤 久美子
加藤 高志 鈴木 玲子 横山 廣子 園江 満

西南中国非漢族の歴史に関する総合的研究

(主査：クリスチャン・ダニエルス/所員4,共同研究員16)

現在の西南中国は、もともと非漢族の居住地域であり、中国歴代王朝の支配下に少しずつ組み込まれていく歴史をもつ地域である。元明清を通じて、漢民族移民の増大と歴代王朝の統治政策によって、多くの非漢族が中央政府に直接支配されるようになり、そのことによって民族移動が激しくなり、非漢族の土着社会に大きな変容がおこり、東南アジア大陸部へ移住する非漢族も出現した。だが、従来この歴史過程を総合的に分析する研究は僅少であった。

本プロジェクトの目的は、西南中国非漢族の歴史に関する研究発表、史(資)料の発掘・収集・整理をおこなうことによって、従来注目されることのなかったこの地域の歴史に対する研究を促進することにある。なお、方法論として非漢族を主体とした分析視点を重視すると同時に、歴史学者以外に文化人類学、民族学、民俗学、言語学などの専門家の参加によって学際的なアプローチの構築をめざす。

なお、本研究所の「歴史・民族叢書」では、『雲南少数民族伝統生産工具図録』及び『四川の考古と民俗』を刊行している。

井上 徹 上田 信 上西 泰之 菊池 秀明 岸本 美緒
末成 道男 武内 房司 多田 狷介 谷口 房男 張 士 陽
塚田 誠之 寺田 浩明 林 謙 一 郎 吉野 晃 渡 辺 佳 成
渡 部 武



マカオのたたずまい
植民地マカオの市政庁の建物、またその前の広場附近は、確かにポルトガル風に見える。しかし、そこからちょっと小路に入ると、もう庶民の生活空間になる。華南でよく目にする風景と、ほとんど変わらない。
(ポルトガル領澳門。1998年11月3日。吉澤誠一郎)

近年における国際情勢の変化と学術交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに、現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量が多すぎて、その実態を体系的に把握してはいない。

また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的で実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に連関していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。

毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。

赤嶺 守	石井 明	石濱裕美子	伊藤秀一	井上 治
井村哲郎	江夏由樹	岡 洋樹	尾形洋一	岡本隆司
小野和子	笠原十九司	加藤直人	岸本美緒	楠木賢道
佐々木揚	坪井善明	中村 義	西村成雄	萩原 守
浜下武志	原 暉之	藤井昇三	細谷良夫	松重充浩
毛里和子	森川哲雄	森山茂徳	柳澤 明	

多様で複雑なアフリカの言語を、アフリカの視点から観察し、研究するプロジェクトである。混沌の底には、おそらく何かの法則が見いだされるに違いないとの、証明され得ない仮説を追い求めてゆく。

音韻・文法研究を中心にすが、言語の社会的役割、言語遊戯、音楽の機能など、マージナルな分野も、研究の対象に入っている。

市之瀬敦	江口一久	大野仁美	小森淳子	桜井 隆
ジョン・フィリップス	砂野幸稔	竹村景子	柘植洋一	中川 裕
中島 久	中野暁雄	稗田 乃	日野舜也	堀内里香
福井慶則	宮本正興	宮本律子	湯川恭敏	米田信子
ラクリフ・ロバート				

多言語共存環境における文字コードと照合 (collation) 系についての研究

(主査：豊島正之 / 所員7, 共同研究員3)

アジアの複数の言語・表記系の混在する環境で、多言語共存電子メール・wwwページ等を正しく表示し、多言語対照テキストデータベース、対訳辞書などを編纂・検索するためには、文字コードを曖昧さなく運用し、それに基づく文字列操作 (string manipulation)・文字列照合 (collation) をおこなうことは、必須の要素である。にも拘わらず、現状の国際文字コード (符号化文字集合) とそれに基づく計算機システムでは、これらアジアの諸言語の文字列操作・照合に対する配慮が十分でなく、提案されている諸システムも、安定的な運用をおこなうには不十分で、現に、現行のUnicode・ISO/IEC10646-1に基づく安定運用がおこなわれているシステムは見出し難い。

本プロジェクトでは、こうした現状を打開し、新たに、将来にわたっての安定運用が可能な国際的な提案をおこなうために、下記の4点について、現状の問題の明確化と、それに対する対案を提案するための基礎的研究をおこなう。

情報交換での識別 (identification) の概念の洗練と、それに基づく符号化文字集合における文字・字体・字形の洗練

アジアの複数の言語・表記系 (例：タイ、カンボジア、ウルドゥー、ドラビダ、ペルシャ、デーバナーガリー、漢字) が共存する環境で、曖昧さなく運用可能な文字コード (符号化文字集合) の策定、およびその運用方法の策定

文字列データに対する基本的な操作 (manipulation) の定義。即ち、文字列に対する基本的な操作である文字検索、「一文字」の削除・追加などについての、実装方法を考慮した定義

複数の言語・表記系が共存する環境での、文化的に正統な文字列の整列 (sorting)・照合 (collation) の方法

文字列出力 (presentation forms)

平成11年度は、本プロジェクトが扱う問題の現状を、参加者それぞれの専門分野について、ネットワーク環境に力点をおいて調査し、それを非専門家にも理解できる形で文書化してネットワーク等で公開する。

池田 証寿 太田 昌孝 安岡 孝一



ジャータカのレリーフ

ミンガラーゼーディーは13世紀後半に建立されたバゴダで、外壁にジャータカ (釈迦本生譚) 各譚の場面が彫られている。表面が削られているのは、モンゴル軍によるバガン朝滅亡の際の損壊であるうか。加えて、今世紀になって少なからぬ数のレリーフが持ち去られたという。下に書かれた文字は、現在のビルマ文字と異なる形式である。

(上ビルマ、旧バガン郊外。1991年4月撮影。澤田英夫)

近代以前の中国周辺地域は、中華文明を長く理想型と見なし、それを積極的に取り込むことにより、自らの文化の正統性を確保してきた。しかし、近代以降は、この地域の諸国家では国境が確定され、国家建設のために西欧近代をモデルとしたイデオロギー（共産主義を含めて）を求心力として国民を各国の中心へ引きつけるという動きが見られた。ところが、近年では、これらの国々は、急速な経済発展を遂げて政治経済的に自信をつけはじめており、いわば「一枚岩の国民」を作り上げるイデオロギーにこだわる必要もなくなり、民主化、対外交流、多様性の容認等といった現象が見られるようになった。他方、中国も対外閉鎖路線から開放政策へと転換を図ることで、経済発展の道を歩みはじめており、地方の主体性を容認して、対外交流を積極的に押し進めるようになってきた。

このような中国側および周辺諸国側双方の変化は、両地域の経済および文化の側面での相互交流を促進し、両地域の伝統文化の変容、民俗文化の再創造といったプロセスが進行しつつある。さらに、このことは、中国国内の周辺部とそれに歴史文化的につながりのある周辺諸地域との間の新たなネットワーク形成、経済・文化圏形成にも繋がってきており、かつての周辺地域を新たな中心とする、中心周縁関係が生み出されつつある。

以上のことから、本プロジェクトでは、昨今の経済発展の中での各地域における民俗文化の再編成・再創造のプロセスを明らかにし、従来の国家の枠組みを解体・再構成するような社会・文化の創造の可能性に関して新しい視点を提起していくことを目的としている。

伊藤 亜人	植野 弘子	小熊 誠	笠原 政治	韓 敏
佐々木 衛	清水 純	秦 兆雄	末成 道男	瀬川 昌久
轟 莉莉	西澤 治彦	沼崎 一郎	秀村 研二	堀江 俊一
渡辺 欣雄				



移牧へ出発の朝

乾季に入り、水と草の多い地域への移動に出るフルへの少年。ロバに曳かせた小さな馬車の上には、穀物袋、衣類の入ったトランクはもちろん、少年の遊び友達でもあるインコも乗っている。撮影は1984年であるが、乾季の移動は今も変わらず行われている。

（セネガル。小川了）

16世紀以降の近代世界システム成立以前に既に存在した、多様な人々が共有する活動空間のなかで最も広範囲なものひとつが「インド洋海域世界」である。紀元前数世紀に姿をあらわし、8世紀から16世紀にかけインド亜大陸をはさんで、アラビアから東アフリカ地域と東南アジア地域とを交易と人の移動によってしっかりと結びつけていたのがインド洋海域世界であり、この海域世界の存在とダイナミズムが、その当時とその後のインド洋に位置する陸世界の歴史や国家、また社会や文化のあり方に多大な影響を及ぼしたことが近年次第に認識されている。

さらに、欧米による近代世界システムによってインド洋海域世界が包摂され、主権国家や領域国家によって陸上はおろか海上まで分断された後も、インド洋海域における人と物の行き来や流通が停止したわけではなく、むしろ欧米のおこなった奴隷交易・契約労働移民・植民地化の諸施策は、新たな人の移動を生み出し、インド洋海域のネットワークを拡大させ、人と物との混交をより一層深めたと見なすことができる。

このように「インド洋海域世界」は、さまざまな言語と文化をもった人々が行き交うなかで作りだした社会と歴史であり、言わば多元性と多層性がその特徴である。それにもかかわらず、フランスやオーストラリアではインド洋を総合的また多角的に考究する研究者や機関があらわれはじめているものの、日本では学会はおろかそのための研究者間の意見や情報の交換また討議の機会や場さえ設けられていないのが現状である。

本プロジェクトでは、最初の3年間を基礎的研究と位置付け、オセアニア・東南アジア・中国・インド・アラビア・東アフリカ・インド洋島嶼の各社会の専門家が集い、まずは「インド洋海域世界」という視点のもとにこの多元性と多層性にアプローチする可能性について論じあってゆきたいと考えている。

具体的な討議項目としては、次のようなものが挙げられよう。

- インド洋海域世界研究の現状と各地域における文書資料の存在の様態とその可能性
- インド洋海域世界の歴史設定と歴史区分
- インド洋海域における年代毎の人と物の移動の具体的把握
- 商業民と海洋民それぞれの活動・移動の特性と両者の相互関係
- インド洋海域にかかわる航海技術の歴史的変遷
- 非文字資料に基づくインド洋海域世界の歴史解明の可能性
- 現代インド洋海域の個別社会の研究を通じ、多元性と多層性がどのようなかたちで共存しているかの考察

3年間の基礎的研究を終了した後は、文部省科学研究費等を申請し、インド洋海域のなかでもとりわけ研究の遅れているモルディヴ、ニコバル、アンダマン、モーリシャスなどの諸社会を中心に、フィールドワークに基づく資料収集をおこなうことを計画している。

秋道智彌 飯田 卓 川床睦夫 崎山 理 杉本星子
高桑史子 田中耕司 富永智津子 花淵馨也 松浦 章
森山 工

独立インドの政治とカースト 州レベルの研究を中心に

(主査：内藤雅雄 / 所員 2, 共同研究員13)

インドは間もなく独立後半世紀を迎える。その間インド政治の重要な問題のひとつが連邦(中央政府)・州関係であったが、憲法の連邦制規定にもかかわらず、実際は中央集権的体制の下に州政治は多大な制約を受けてきた。しかし、近年、かつて一党独裁と形容された国民会議派の組織力は脆弱化し、連立政権体制が不可避の実現となっている。今や連邦制のあり方、州政治の意味・役割に関する新たな検討が重要な研究課題である。

本プロジェクトは、こうしたインドの州政治状況の変化と実態をカースト諸関係をひとつの手がかりとして考察する。州政治を動かす要因はさまざまであるが、重要な鍵がカーストである点は今日なお否定できない。「政治のカースト化」「カーストの政治化」という現象はますます顕著である。一方、従来のインド州政治研究が扱った各州のカースト状況にも大きな変化がおこっている。特に1980年代以降の「下層階級(カースト)=OBC」をめぐる「留保問題」、指定カーストに基盤をおくバフジャン・サマージ党の台頭等々、多くの新しい現象が見られる。

主要な作業は、各州のカースト間の諸関係を明らかにし、特定のカーストの政治的結集や複数カースト間の政治的提携、あるいは離反・対立をもたらす諸要因を検討することである。さまざまなレベルの選挙でのカースト票の流れだけでなく、インド特有の社会区分といわれるカーストと政治のつなぎ目を州別に具体的に探る。選挙や政治活動によって出来上がったカースト関係(「政治化したカースト」)が、社会生活上のカースト関係にどうフィード・バックしていくかという観点も必要であろう。本プロジェクトの中心テーマは政治であるが、より深い考察を目指し、政治・歴史・経済及び文化人類学の分野の研究者を含む研究体制で進める。

粟屋利江	井坂理穂	井上恭子	押川文字子	近藤則夫
佐藤宏	篠田隆	杉山圭子	関根康正	田辺明生
長谷安朗	山田桂子	脇村孝平		



バンガロール市内の1コマ
(1998年夏撮影。町田和彦)

東南アジアにとって20世紀とは何か - 20世紀東南アジアの思想状況

(主査: 根本 敬 / 所員 6, 共同研究員16)

20世紀の東南アジア史を概観するという時系列的な問題意識ではなく、東南アジアの歴史に「20世紀という時代」がもたらした思想状況上の変容を問題にし、それに基づいて東南アジア史の側から見た「20世紀」の総括を試みるものとする。

その際、以下に掲げる三つの小テーマを設定し、議論を深めることにする。

経済思想

国民国家形成をめぐる諸問題

「前近代」の再解釈

東南アジアの歴史を扱うため、プロジェクト参加者は前近代史研究を含む歴史研究者を中心とするが、そのほかにも東南アジアをフィールドとし、かつ現地の言語と文化に通じている政治学者、経済学者、人類学者および文学研究者にも参加を要請する。

石井和子	内山史子	奥平龍二	川島 緑	菊池陽子
小泉順子	齋藤照子	嶋尾 稔	杉山晶子	末廣 昭
鈴木恒之	土佐桂子	中野 聡	弘末雅士	古田元夫
村嶋英治				

Transitivity and Actancy Systems in Syntactic Typology

(主査: 菊澤律子 / 所員 4, 共同研究員18)

本プロジェクトは、世界のさまざまな言語について言語類型論的・記述言語学的研究をすすめている研究者が集まり、自説を発表し、他の言語を専門とする研究者とディスカッションを進め、自らの研究に還元していく、といった機会を提供することを目的とする。

1999年度は昨年度に引き続き、言語の統語類型論的研究におけるさまざまなトピックのなかから、特に「他動性」と「能格性」の問題に焦点をあて、関連するさまざまな研究発表を通して、多様な理論的アプローチや諸言語における直接・間接の諸問題について検討してゆく。参加者全員が同じ方向に収束していくことを目標とするよりは、検討の過程でそれぞれ自分のものとは異なる視点・分析のしかたに接し、それぞれのアプローチの利点と限界について考察する機会を持つことに重点を置く。

研究会およびメーリングリストへは一般の参加者も歓迎し、また、随時、分野・トピックにこだわらない特別研究会の企画をおこなうなど、言語学関係者間でのネットワークとしての役目も果たしてゆきたいと考えている。

赤嶺 淳	大堀壽夫	風間伸次郎	加藤昌彦	カバケ・マーク・ロバート
北野浩章	桐生和幸	崎山 理	佐々木冠	柴谷方良
高橋慶治	月田尚美	角田太作	中村 涉	藤井義久
堀江 薫	吉本 啓	渡辺 己		

本研究所では、1978年にメインフレーム・コンピュータを導入して以来、アジア・アフリカの言語文化に関する多言語多文字のテキストデータを入力・処理して研究成果をあげてきた。また、その課程で蓄積されまたされつつあるアジア・アフリカ諸語の言語データ(テキスト、辞書など)の情報資源は、各専門分野での今後の研究にとっても価値の高いものが多く含まれる。特に本研究所の設置目的のひとつである「アジア・アフリカ諸語の辞典編纂」事業に沿って刊行された各種辞典の資源は、成果として印刷出版されたもの以上に、国内外の不特定多数の研究者・学習者による利用の可能性を秘めている。

しかし、これらの蓄積されてきた情報資源の内容形式・利用形態は、メインフレーム・コンピュータに依存していることが多く、今日のようなネットワークを前提とする研究環境に必ずしも対応していない。そのため利用者の立場から見ると、以下のような使用上の限界や制限が指摘できる。

- マシンの操作に関する専門的知識が必要である
- テキストデータに使用されている文字コードが特殊である
- 研究成果は主にプリンタへの出力を前提にしている

本プロジェクトは、メインフレーム・コンピュータに従来蓄積されてきたテキストを中心とする情報資源のこうした限界や制限を克服して、公開化を前提とするより汎用的な利用に備えることを目的としている。

本プロジェクトが計画している主な研究および作業は以下のとおりである。

- 移植性の高い多言語多文字コードの研究
- データフォーマットの研究
- 入力・点検が未完なデータをチェックし対応する
- 利用形態の研究
- 検索を含む各種ツール類の研究

公開化に関しては、本研究所の情報資源利用研究センターと協力して、利用の条件や形態などを考慮して実施する。その際、著作権の問題には特に留意する。

石川 巖	梅田博之	大江孝男	大原良通	坂本恭章
竹内紹人	中野暁雄	永田雄三	奈良 毅	林佳世子
林 徹	星実千代			

歴史的イラン世界に関する研究

(主査：家島彦一 / 所員4, 共同研究員13)

この共同研究の目的は、歴史的脈絡でのイラン、すなわち 大イラン (the greater Iran) という枠組みのなかで、イラン的要素 とは何かについて、言語・歴史・文化・思想などの総合的な視野のなかで問いかけを試みることにある。具体的な研究方法としては、イスラム世界におけるイラン世界の位置付け、イラン世界と他世界 (例えばトルコ・クルド・アラブ・インドなど) との相互関連や差異を考察することによって、イラン的要素の全体像を浮き彫りにしていく。その結果として、われわれが漠然と抱いていたイラン・イメージについて、その言語・文化・社会の特質や問題を改めて問い直し、イスラム研究に新たな方向を見出したいと考えている。

第一年度目と第二年度は、基本的な問題の設定、各々の共同研究員による事例研究を通して、イラン的要素に関する特質や問題を発見していきたい。特に、第二年度における研究課題として、イスラム以前におけるイラン的要素とイスラム以後のイラン的要素の比較、シーアとイラン的要素との関わりなどについて考察する。

今澤 浩二	小名 康之	川 瀬 豊子	北川 誠一	近藤 信彰
坂本 勉	清水 和裕	寺島 憲治	縄田 鉄男	間野 英二
山内 和也	山口 昭彦	吉田 豊		

独立後アフリカ諸国における国家と宗教

(主査：小川 了 / 所員4, 共同研究員12)

本プロジェクトにおいては、独立後のアフリカ諸国、特に現代において国家と宗教がどのように協調、相克しているのかを記述、分析し、アフリカ各国の将来を展望することを主眼とする。

アフリカ諸国において、伝統宗教、イスラム教、キリスト教は人々の糾合にどのような役割を果たしてきたのか、あるいは果たしていないのか。それらの宗教は新生国家において国民統合に役割を果たしたのか、あるいは国家機構の横暴を牽制する役割に終始しているのか。ひとつの国家のなかでイスラム教徒、キリスト教徒など異なった宗教信奉者が対立することで、国民統合に宗教が阻害要因になっていることはないか。国家の内実が問われ、民主化の実現が急務になっている現在、諸宗教にはどのような機能を果たすことが要請されているのだろうか。原理的に言えば、本来、国家のめざすところと、宗教のめざすところとは相矛盾するものである。でありながら、ヨーロッパ諸国、そして日本においても国家と宗教は相互に依存しあうことが歴史的に多かった。アフリカ諸国の国家と宗教の現状を検討し、将来的な動きをも予測する研究をおこないたい。

遠藤 貢	小田 亮	落合 雄彦	勝俣 誠	栗本 英世
小馬 徹	嶋田 義仁	竹沢 尚一郎	津田 みわ	松田 素二
吉田 憲司	和崎 春日			

イスラーム圏における国際関係の歴史的展開 - オスマン帝国を中心に -

(主査：黒木英充 / 所員 5, 共同研究員20)

本プロジェクトは、イスラーム圏において国際関係がいかに形成され、認識され、発展してきたかを、総合的に研究することを目的としている。その出発点として、600年以上にわたって中東地域の核核部で発展し、また文書資料による情報を豊富に蓄積してきたオスマン帝国を対象に選び、その対西方すなわち地中海・西欧地域に向けて、対北方すなわちロシアに向けて、そして、対東方の中央アジアとイラン、インド洋地域に向けて、そしてさらに可能であれば、対南方のアフリカ内陸地域に向けての、それぞれの国際関係の実態を、時代的な発展過程に留意しながら多角的に論ずる場をつくりだしたい。ここでいう国際関係とは、国家間の外交関係のみならず、その基層をなした人間たちの交流の具体相もふくむ広義のものである。従って、国際条約とイスラーム法の関係、戦争と安全保障、外交団の構成と活動、通訳、貿易と関税、巡礼といったさまざまな問題が設定される。これらの課題を、古代西アジア世界もふくめた長期的展望のなかで位置づけ、同時に現代世界の国際関係、とりわけ中東地域をめぐる国際政治に対しても新しい有効な視座を提供できるように検討してゆく。

稲野 強	江川ひかり	小山田紀子	川口 琢司	小松 香織
佐藤 幸男	佐原 徹哉	新谷 英治	鈴木 董	高松 洋一
永田 雄三	野坂 潤子	羽田 正	深澤 克巳	堀井 優
堀川 徹	松井 真子	三沢 伸生	宮崎 和夫	山口 昭彦

アル=アフガーニーとイスラームの「近代」 (主査：飯塚正人 / 所員 2, 共同研究員20)

イラン生まれのジャマル・アッ=ディーン・アル=アフガーニー (1897年没) は、その生涯にアフガニスタン、インド、エジプト、トルコといったイスラーム圏の各地とヨーロッパ諸国を訪れ、19世紀後半以降のイスラーム世界の歴史に大きな思想的影響を与えた革命家である。彼は伝統的イスラーム思想の改革や専制政治の打破など、ムスリム社会内部における変革の必要を唱える一方、各地でヨーロッパの侵出に対するムスリムの団結 (パン=イスラミズム) を説いて回った。エジプトのオラービー運動、イランのタバコ・ボイコット運動など、19世紀末に各地で起きた「民族」運動も、彼の存在を抜きにして語ることはできないし、現在イスラーム世界が直面している思想的課題のほとんどはアル=アフガーニーのもとですでに予感されていたといっても過言ではない。

本プロジェクトは、没後100年を迎えたこの偉大な革命家の思想や足跡、各地における評価などを総合的に分析することによって、最終的にはイスラーム世界における「近代」の意味まで問い直すことをめざす。また、上記目的をより効果的に達成するため、文部省科学研究費創成的基礎研究『現代イスラーム世界の動態的研究』の1-a班「現代イスラームの思想と運動」と緊密に連携しつつ研究を進めていく予定である。

新井 政美	池内 恵	大石 高志	大塚 和夫	帯谷 知可
加賀 谷寛	粕谷 元	栗田 禎子	小杉 泰	小松 久男

酒井啓子 佐藤規子 鈴木 均 高岡 豊 富田健次
中田 考 中西久枝 八尾師誠 松本 弘 三木 亘

東南アジア島嶼部における人の移動

(主査：宮崎恒二 / 所員3, 共同研究員6)

人類史的な観点からみると、人は常に移動と接触を繰り返すことによって、集団の離合集散を繰り返してきた。現に存在する「民族」なども、そのような離合集散の産物といえよう。人の移動は、領域と境界を生命線とする近代の国家体制下では、必然的に制限が加えられる。しかし、今日、部分的には資本主義の無境界的浸透とも対応する形で、人の移動は活性化し、国家の枠組みすら脅かしている。

このプロジェクトでは、現代における人の移動を文化、とりわけ集団意識の生成・変成過程に注目して、研究を進める。

このプロジェクトでは、広い分野、地域を対象として問題領域の設定を試みた重点共同研究プロジェクト『東南アジアにおける人の移動と文化の創造』(1996-1998)の成果を踏まえ、より詳細に個別具体的な研究を実施する。

主たる対象とされる地域であるマレーシアのサバ州は、インドネシア及びフィリピンとの間で人の移動が激しく、集団の構成、意識、生活世界の構築、といった諸側面で、様々な方向性や動きがみられる。このプロジェクトでは、現地調査と並行して研究会を開催し人の移動を文化的側面から解明する。

石川 登 伊藤 眞 上杉富之 清水 展 富沢寿勇
山下晋司

活字字体史研究

(主査：芝野耕司 / 所員2, 共同研究員11)

目的：18世紀に始まった近代活版印刷で用いられてきた漢字字体の変遷を分析することによって、次の点を明らかにする事をめざす。

いわゆる康熙字典体

慣用字体

明朝体の基本設計

また、この研究を通じて、新JISコードの代表的字体の決定に学問的根拠を与えるとともに、国語審議会での問題となっている漢字字体問題の学問的根拠にも寄与することをめざす。

研究方法：康熙字典及び18世紀以降の活字総数見本帖を収集し、一字毎に字体対照データベースを作成し、このデータベースの検討を通じて、上記の研究目的を達成する。

成果物：研究成果物は、新JIS漢字コードの代表字体に活かすとともに、JIS X 0208の将来の改正で用いることのできる代表字体の決定の基礎資料とする。個別字体検討資料は、各社での字体設計の基礎資料として用いることができる資料の作成をめざす。また、国語審議会でも検討されている表外字の字体検討に対しても、学問的基礎を与えることをめざす。

最終的な報告は、単行本として刊行することも予定する。

石塚晴通 池田証壽 金子和弘 小池和夫 小駒勝美
小宮山博史 境田稔信 鈴木広光 直井 靖 比留間直和
府川充男

その他のプロジェクト

言語研修

(主査：新谷 忠彦 / 所員 8 , 共同研究員 4)

本研究所で実施される言語研修の目標は、以下の諸点である。

口語および書き言葉の能力をつける

言語の科学的研究と実際の応用の訓練の提供

大学院相当の学生に野外調査を実施するための手段としての言語習得の援助

言語研修プロジェクトは、研修・辞典委員会に属する所員と、当該分野に精通する共同研究員によって構成され、アジア・アフリカの言語に習熟し、実際に役立つ能力を高める最も効果的な方法を検討することをめざしている。

また、上記所員と共同研究員にさらに研修委員会(8頁参照)委員を加えた合同会議が年1-2回開催され、研修言語の選定、教授法、開催時期・期間、実施方法、評価等について討論する。

長野泰彦 松村耕光 森安孝夫 吉川武時



バダウン族観光村の学校

メーホーンソーンの町から車で約40分、ビルマ国境からそれほど遠くないところにその「村」はある。「入場料」を払い、土産物売家々の横を通っていくと、吹き抜けの教室で読本の授業をやっていた。生徒の中には、この民族の象徴である金の首輪をつけた子もいる。読本はビルマの(小学校)第1学年のもの。おそらくはこのクラス、いや村人全体がビルマからの越境出稼ぎなのだろう。

(タイ北部、メーホーンソーン県ナイソイ村。1997年1月撮影。澤田英夫)

卓越した研究拠点（COE）

アジア・アフリカ言語文化研究所は、平成7年度より文部省によって卓越した研究拠点（Center of Excellence, 略称COE）に指定され、従来にもまして学術的な研究において先導的な役割をこなうことが期待されるようになった。具体的には、「中核的研究機関支援プログラム」により、様々な研究事業を展開している。本研究所ではこのプログラムによる事業の重点を、学術研究の情報化と国際化とに置きながら進めている。

情報化の側面では、昨今の高度情報化社会におけるインターネット等の新たな環境に対応した研究資料や研究成果のデジタル化による公開という側面に力を注いでいる。例えば、平成9年度には「先導的研究設備費」により「言語文化研究支援音声・画像信号等変換システム」を導入し、アジア・アフリカ地域の諸言語および文化に関して研究者が収集してきた音声と画像資料のデジタル化を進めている。また、「研究高度化推進経費」では、これまで平成7年度から9年度まで「アジア・アフリカ諸民族の画像・音声・テキスト・データベースの基礎的研究」を行なった。平成10年度からは3年計画で同経費によって「アジア・アフリカ言語文化に関する電子事典の構築」を開始している。これらの研究では、言語学・歴史学・人類学の諸分野において蓄積されてきたフィールド資料（テキスト・音声・画像など）をデータベース化し、インターネットを通して公開する事業を推進中であり、このことによって、アジア・アフリカ地域のこれらの分野の研究に従事する国内外の研究者に良質かつ最新のデータを提供することが可能になってきている。

国際化という面では、「国際シンポジウム開催経費」によって、国内外の先進的な研究を行っている研究者を招へいして、国際シンポジウムを開催している。平成8年度には「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」（8年12月3日 - 5日）、平成10年度には「音调の通言語的研究」（10年12月10日 - 12日）を開催した。また、今年度は「南アジアにおける言語接触と収束的発達」（11年12月6日 - 9日）が開催予定である。また、「外国人研究員経費」により、主に情報化の専門知識を有する国外の優秀な研究者を招へいし、所員との間で共同研究を進めることによって、研究の情報化・国際化を推進している（招へいされた研究者名については、28頁参照）。

もちろん、こうした情報化や国際化に関わる事業については、この方面の専門家のサポートが欠かせない。このため、「COE非常勤研究員経費」によって専門知識を有する若い研究者の助力を得ている。非常勤研究員は平成7年度から8年度にかけて、2名が在籍していた。また平成9年度からは3名（久住真由・芝崎朱美・中村美奈子）が、活躍中である。また更に9年度10月より1名が増員されたが、11年1月より前任者を引き継いだ1名（菅原純）が着任している。これらの研究員は、それぞれの研究テーマに基づく個別研究を進めていくと同時に、ネットワーク環境の整備、研究所のホームページ作成および維持管理、データベース構築の支援、国際シンポジウム開催のサポートなどの研究所全体の事業に関わる任務を負っている。

以上がCOEとしての研究事業の概要である。本研究所は、今後もますます先導的な研究拠点として、最新かつ高水準の研究資料や成果を国内外に向けて広く発信し、言語学・歴史学・人類学・情報学などの分野の研究の進展に大きく貢献することをめざしていく。

情報資源利用研究センター

1. 設置目的

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター（Information Resources Center / TUFS, 略称 irc-TUFS）は、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発、国際学術交流の推進を目的として、10年の時限で、平成9（1997）年度に設置されたものです。

2. 研究所とセンター

本研究所は、従来から、アジア・アフリカの諸言語のデータをコンピュータ化し、それぞれの言語の音韻論的・統語論的・語彙論分析をおこなうとともに、歴史的・民族的・社会学的研究等、多目的な用途に供するデータベースの充実を図ってきました。このデータベースは、本研究所の最も重要な事業のひとつである、アジア・アフリカの諸言語の辞典・文典の編纂の基礎資料を提供し、かつ全国の研究者の共同利用に供されています。言語データとしては、ベンガル語、中国語、朝鮮語、ハウサ語、フラ語、ヨルバ語、ヒンディー語、クメール語、アラビア語、ペルシア語、スワヒリ語、タイ語、チベット語、満州語等が蓄積されつつあり、これと並行して、デーヴァナーガリー、ビルマ、ベンガル、タイ、クメール、チベット、アラビア、ハングル、モンゴル、西夏などのプリントアウト用文字フォントが作成され、利用に供されてきました。

3. 10年の活動

センターは、上記のようなこれまでの研究所の活動を基礎に、10年間で、下記の点で、理論・技術の整備・洗練をおこなうことをめざしています。

(a) アジア・アフリカの言語文化に関するコンテンツ公開の場として

所内には、上記のような言語データだけでなく、アジア・アフリカの言語文化に関する多様な資料（パンフレット、ポスター、フィルム、8ミリ、ビデオ、録音テープ等）が豊富に所蔵されています。このデータの所内・所外での利用は必ずしも容易ではなく、公開に向けた整備が緊要です。

(b) 国際的共同研究の場として

データベースを国際的に公開・共有し、それに基づく研究支援の環境をつくり、国際的共同研究の効率化と内容の充実を図ることをめざしています。

(c) コンテンツ蓄積・交換に関する基礎理論の整備母体として

通時的文字論を考慮した文字コード（符号化文字集合）論、多言語処理論、多表記系（スクリプト）の照合（collation）・整形・組版基礎理論等、従来、理論的な整備がほとんどない分野を理論化することは急務といえます。また、多表記系（スクリプト）混在でのinput methods、整形・組版結果の交換プロトコル等、まだ仕様自体が不安定な分野の仕様の洗練、さらには、画像・動画・音声抽象検索などのマルチメディア系でのinput methodsとインタフェースにも、今後積極的に関与していく予定です。

4. デジタル言語文化館

センターの研究活動の成果は、世界に向けて開かれていなければ無意味です。このため、センターは、「デジタル言語文化館」を構想しています。「デジタル言語文化館」は、当面はwww (HTTP) で訪問・利用できる形で提供されますが、媒体には拘束されません。

「デジタル言語文化館」は、単なるコンテンツの羅列ではなく、その加工技術・呈示技術とその背景の理論化自体もコンテンツとなる点が特徴であり、蒐集展示と、蒐集資料・技術の工具利用の両方がおこなえるところが、従来のデジタルライブラリ（電子図書館）発想を包含しつつ、それを越える点です。

5. 技術と研究の相互発展

センターは、望まれる技術の要求仕様を策定するのであって、技術自体を開発する場ではありません。望まれる技術とは、新しい技術の呈示によって技術への需要自体を呼びおこし、その結果、新たな研究工具を提供することで研究開拓のきっかけとなるような技術であり、すなわち、今は「技術的制約によって無理」と諦められ、研究分野自体が研究として認識されていないものを、明らかにするような技術を指します。

研究者の主体的発想による技術仕様の策定は、本センターのように、言語・歴史・民族・情報の各分野の専門研究者を擁し、技術と研究の相互刺激を主眼として研究を進める専門機関によって、はじめて生れ得る成果と言えましょう。



リキール寺の壁画

インド最北端に位置し、チベット文化圏の最西端にあたるラダックには、こんな楽しい壁画のある寺がある。よく見ると壁画の絵の一つ一つから点線が出ていて、その先にはきれいなチベット文字で細々と説明が書かれている。絵で見る辞典という趣だ。

(インド、ジャンムー・カシミール州、ラダックにて。1998年8月撮影。星泉)

外国人研究者の招へい

本研究所は、国際的な学術交流・共同研究を推進するために、外国からアジア・アフリカの言語文化の専門家を外国人研究者として受け入れ、研究の便宜を供与しています。比較言語文化論研究部門ならびに言語文化情報研究部門の情報開発分野は、外国人研究者を客員として受け入れるためのポストです。このほか日本学術振興会や国際交流基金の招へい計画などで来日する外国人研究者を、随時受け入れています。この4年間に外国から受け入れた研究者は以下のとおりです。
(*はCOE外国人研究員、 は客員以外の研究員)

1996	方素梅 Trias i Valls Maria Angels	中国	中国少数民族史
	* 李 範文 Sudhir Chandra	スペイン 中国	社会人類学 言語学(西夏語)
	Aldo Tollini 林 美容	インド イタリア	思想史 言語学
	Moeljarto Tjokrowinoto Evelyn Tan Cullamar	台湾 インドネシア	文化人類学,台湾・中国・シンガポール研究 開発理論, 開発政策論
	Vladimir Leonidovich Uspensky Elena Nikolaevna Uspenskaya	フィリピン ロシア連邦	フィリピン学, 国際関係史 内陸アジア史, 文献学
	Tsedendambyn Batbayar 何 星亮	ロシア連邦 モンゴル	文化人類学, 南アジア研究 国際関係論, 歴史学
	Amir-Bagher Madani	中国	民族学
	* Sumru Ozsoy	イラン	経済学
1997	Geetanjali Pandey	トルコ	言語学
	Abhi Subedi 藤村 靖	インド ネパール	現代インド史, ヒンディー文学 文学, 比較文化
	Mangantar Simanjuntak Belinda Ancheta Aquino	日本 インドネシア	音声科学 言語学, マレー語学
	Gustaaf Houtman Keralapura Shreenivasiah Nagaraja	フィリピン オランダ	政治学, フィリピン学 社会人類学, 宗教学人類学
	* Lars Erik Axel Johanson David John Nathan	インド スウェーデン	電算言語学, オーストラアジア言語学 言語学(チュルク語)
	Eva Agnes Csato Johanson	オーストラリア	応用言語学
1998	* Apolonia Tamata 片山素子	ノルウェー フィン	言語学, チュルク語学 言語学
	阿孜古麗古力 沈 靖子	中国 日本	言語学, 音韻論 言語学, 言語教育
	Nasiri Mohammad-Reza 史 金波	中国 イラン	歴史学 歴史学
	索 文清	中国	言語学, 西夏学
	Prakya Sree Saila Subrahmanyam Lawrence Andrew Reid	中国 インド	民族歴史学 言語学
1999	Kenneth William Cook John Gongwe Kiango	アメリカ アメリカ	言語学 言語学
	* Didier Louis Nadia Goyvaerts	タンザニア ベルギー	認知及び応用言語学 語彙学, 辞書編纂学 言語学

外国研究機関との共同研究

本研究所は、かねてより海外の研究機関と研究資料・情報の交換、研究員の相互交流、共同研究調査の実施等を通じ学問上の国際協力を進めてきましたが、最近ではさらにこれらの機関のいくつかと正式に学術協定を結び、国際協力の一層の充実を図ろうとしています。これまでに学術協定を結んだ研究機関名と締結年および共同で実施した事業等は、以下のとおりです。

外国機関名(略号) / 締結年 / 国名

国立科学技術研究機構 (ONAREST)
(現・高等教育・情報科学・科学研究省
(MESIRES)) 1978. カメルーン

文部省科学研究費補助金による現地調査「アフリカ部族社会の比較調査」(1969-76)におけるカメルーンとの共同研究を経て、カメルーン国立科学技術研究機構の人文科学研究所所長を招へい、本研究所で協定締結(1978)。所員の現地における共同研究(1980-81, 82, 84, 86): カメルーン研究者の現地調査参加(1982, 84, 86, 87, 89, 90, 91): 本研究所におけるカメルーン研究者の成果刊行, 単行本8冊(African Languages and Ethnographyシリーズ), 論文1点(Sudan Sahel Studies所収)。

インド諸語中央研究所(CIIL)1987. インド

CIIL所長本研究所訪問(1983), 副所長来訪(1985), 所員来所, 共同研究(1984-85, 1991-92): 本研究所所員CIIL訪問(1982, 87, 88, 89, 91, 92): 共同研究プロジェクト「南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成」を実施, 共同研究年次報告書発行(1990, 91, 92)。

インド統計研究所(ISI)1987. インド

ISI特別客員研究員本研究所来所, 共同研究(1985-86), 経済研究部長来訪(1988): 本研究所所員ISI訪問(1987, 88, 89, 90, 91): 共同研究プロジェクト「電算機補助によるラビンドラナート・タゴールの言語の分析的研究」を実施中(1987-): 電算資料シリーズ3冊発行(1987, 88, 90)。

チベット言語文化研究所(LCAT)

1988. フランス

敦煌の古代チベット語文献のデータベース化をおこなっているが, その一部のKWIC索引は, *Choix de Documents Tibétains à la Bibliothèque Nationale III Corpus Syllabique*として, フランス国立図書館から1990年に出版された。

人文科学研究所(ISH) 1988. マリ

文部省科学研究費補助金による現地調査「ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究」を継続的に実施し, その成果を*Boucle du Niger: Approches multidisciplinaires*, Vol.1. (1988), Vol.2. (1990), Vol.3. (1992)として刊行した。

農業計画・経済研究センター(CAPES)

1996. イラン

国際学術研究「イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究」の実施を契機に, 将来幅広くイラン文化と日本文化に関する共同研究プロジェクトを組織する目的で研究協力協定が締結された。両研究機関の共同研究員に, 研究員と同等の便宜と援助をおこなうことになっている。

情報文化省文化研究所(IRC)1997. ラオス

「シャン文化圏」プロジェクトを円滑に進めるため, ラオスとの共同研究を目的として学術協力協定が締結された。

国際学術研究

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行うことを重要な研究課題のひとつとしています。過去5年間に、文部省科学研究費補助金（国際学術研究）で、本研究所員が組織した研究は以下のとおりです。

- 1) アフリカにおける「音文化」の比較研究（1995-96, 川田順造）
- 2) 東アジアにおける情報伝達と人間移動 - 南北の比較研究 - （1995-96, 中嶋幹起）
- 3) 南部アフリカ地域の諸言語の言語学的記述・比較研究（1995-96, 加賀谷良平）
- 4) イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究（1995-96, 家島彦一）
- 5) アラブ遊牧民の移動と環境適応メカニズムの研究 - 「水」が創る文化と社会 - （1995, 西尾哲夫）
- 6) シャン文化圏における言語学的・文化人類学的調査（1996-98, 新谷忠彦）
- 7) 南インド・タミル地域の社会経済変化に関する歴史的研究（1997, 水島 司）
- 8) インド諸言語のための機械可読辞書とパーザの開発（1997-98, ペーリ・バースカララオ）
- 9) イスラム圏における交通システムの歴史の変容に関する総合的研究（1998-99, 家島彦一）
- 10) 東南アジア島嶼部における国際移動に関する文化人類学的研究（1998-99, 宮崎恒二）
- 11) 東アジア沿海地域における民俗文化再生過程の人類学的研究（1998-99, 三尾裕子）
- 12) 北部中央バントゥ諸語の記述・比較研究（1999, 加賀谷良平）
- 13) アジアの文字と出版・印刷文化及びその歴史に関する調査研究（1999, 町田和彦）
- 14) 中央アジアにおける共属意識とイスラムに関する歴史的研究（1999, 新免 康）

なお、このほか各種財団の助成金による海外学術調査も組織されています。「海上ルートを通じての東西の文化的・経済的交流 - インド洋周辺の港市遺跡の調査 -」（研究代表者・家島彦一, 1984-85）、「フィリピン・フォークカトリシズムの歴史人類学的研究」（研究代表者・池端雪浦, 1984-87）などがその一部です。

「国際学術研究に関する総合調査研究」（通称「総括班」）の活動

文部省科学研究費補助金（以下「科研費」という）を受けている「総括班」は、本研究所所長を代表者とし、他のさまざまな機関に所属する研究者によって組織され、本研究所に事務局をおいて、科研費にかかわる研究者・研究組織相互間、および研究者側と文部省・日本学術振興会の間の情報交換、連絡調整などの活動を行っています。

活動の主なものとしては、科研費で海外に派遣される研究組織の代表者を集めて情報交換をおこなう「研究連絡会」の開催や国際情勢に即応した研究調査を可能にするための「学術研究体制調査のための海外派遣」および『海外学術調査ニュースレター』（年3回）の出版があります。

長期研究者派遣

アジア・アフリカの言語文化の研究にとって、各地域で話されているさまざまな言語の習得が必須であることは言うまでもありません。本研究所では助手等の若い研究者をそれぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に派遣しています。この現地投入は、言語を自由に話し、あるいは読み、書く能力を獲得するだけでなく、長期間現地の生活にどけこむことによって、その地域の文化や歴史の研究に対する幅広い視点を身につけることを目的としています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計34名が派遣されました。

- 1967-69 石垣幸雄（エチオピア）、守野庸雄（タンザニア）
1969-71 松下周二（ナイジェリア）、家島彦一（アラブ連合）
1971-73 内藤雅雄（インド）、中野暁雄（モロッコ、南イエメン）
1973-75 福井勝義（ソマリア）、中嶋幹起（香港）
1975-77 加賀谷良平（ボツワナ）、湯川恭敏（タンザニア、ザイール）
1977-79 石井 溥（ネパール）、藪 司郎（ビルマ）
1979-81 羽田亨一（イラン、トルコ）、清水宏祐（アラブ連合、イラン、トルコ）
1981-83 山本勇次（ネパール）、新谷忠彦（ニューカレドニア）
1983-85 辻 伸久（中国、香港）、水島 司（インド）
1985-87 中見立夫（中国、モンゴル）、梶 茂樹（ザイール、ケニア、ザンビア）
1987-89 松村一登（フィンランド、ソ連）、宮崎恒二（オランダ、インドネシア）
1989-91 林 徹（中国、トルコ）、栗本英世（エチオピア、ケニア）
1991-93 栗原浩英（ベトナム、ロシア）、峰岸真琴（インド）
1993-95 新免 康（中国、独立国家共同体、イギリス）、根本 敬（イギリス、タイ）
1995-97 飯塚正人（エジプト、イギリス）、黒木英充（シリア、フランス）
1997-99 吉澤誠一郎（フランス、イギリス、中国、台湾）、西井涼子（タイ、イギリス）
1999-2001 澤田英夫（オーストラリア、インド）、本田 洋（韓国、イギリス）



タイのラマダーン

バンコク郊外、ラマダーン（断食）期間中は夜様々な催しが行われる。こんなにムスリムがいたのかと驚くほど何千人もの人出でにぎわう。食べ物や衣類の出店が立ち並ぶ様子は、タイ仏教徒の祭りとは何ら変わらないかのようなのである。ただ、女性がベールを、男性が帽子をかぶっていること、催しがタイボクシングや映画ではなく、金融についての討論会であったところが異なる。（1998年1月。西井涼子）

短期共同研究員（公募）

1978年度より、共同研究プロジェクトとは別に、本研究所において一定期間（2週間以上2カ月以内）研究をおこなう共同研究員を公募しています。

大学院地域文化研究科博士後期課程

東京外国語大学では、多元化した言語・文化・歴史・政治・経済などを統合し、かつ深く掘り下げうる教育者・研究者の育成という学術的な要請と、国際交流の高度化・複雑化に伴う高度な知識を有する国際的な人材や専門職員の需要に応ずるために、言語教育と地域研究をより高度に発達させた大学院地域文化研究科博士後期課程を1992(平成4)年度より設置しました。本研究所では教育体制のこうした発展に協力すべく、本研究所に大学院委員会を設置し、18名(1999年度)の教官が参加し、言語学・民族学・文化人類学・歴史学などの分野における学生を受け入れ、教育活動に従事することとなりました。

研 究 生

大学卒業かそれと同等以上の学力がある者が研究所で研究に従事することを希望するとき、審査の上、研究生として入所を許可します。

研究生は入所料及び研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。



カゴを運ぶ馬

上ビルマ、シュエポウ近辺にて。ひとつひとつは軽くても、このように多くのカゴを一度に運ばされるとなると、たった一頭の馬では大変。

(1994年12月撮影。根本敬)

言語研修

本研究所では、アジア・アフリカ地域の言語の修得のために、本研究所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者を講師として、毎年夏、言語研修を開講しています。開講する言語の数は、東京会場が2言語、関西会場が1言語、研修期間は150時間です。最近、言語研修を実施した言語は、次のとおりです（1999年実施決定を含む） 24頁参照

研修言語名(修了者数)

年度	東京会場	関西会場
1981	ヒンディー語(8), パシュトー語(10)	中国語中級(26)
1982	アラビア語エジプト方言(12), ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1983	チベット語(12), フィンランド語(21)	パンジャブ語(8)
1984	ピリピノ語(タガログ語Y(12), ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1985	朝鮮語(14), カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1986	西南官話(5), タミル語(12)	ベンガル語(8)
1987	中原官話(10), タイ語(19)	シンハラ語(8)
1988	ベルシャ語(10), トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1989	ベンガル語(20), ベトナム語(9)	アラビア語エジプト方言(15)
1990	朝鮮語(11), インドネシア語(11)	ベルシア語(14)
1991	エストニア語(12), ビルマ語(15)	中国語(13)
1992	ネパール語(12), アラビア語エジプト方言(15)	フィリピノ語(12)
1993	朝鮮語(17), グルジア語(17)	モンゴル語(17)
1994	ウォロフ語(9), ヒンディー語(11)	トルコ語(22)
1995	アムハラ語(5), チベット語(25)	上海語(12)
1996	タイ語(14), 現代ヘブライ語(12)	ヨルバ語(7)
1997	テルグ語(10), モンゴル語(11)	ハンガリー語(7)
1998	アイヌ語(2), ハヤ語(11)	カナダ語(5)
1999	フィジー語(), ベルシア語()	ウルドゥー語()

研修生(各言語約10名)は、大学など研究機関を通じて全国から公募します。受講を認められた者は入所料, 受講料を納付することになります。また, 課程を修了した人には審査のうえ修了書が授与されます。

上記の研修事業と関連して, より効果的に充実した研修方法を開発するための研究の一環として, 科学研究費補助金による支援を受けつつ, 言語研修において自動学習機器に合わせて機械化する部分をプログラム(CAI)化するための研究を実施しています。この研究によって開発した「CAIプログラム」は, 研修コースのなかで補助教材として活用することが期待されるばかりでなく, 必要に応じて希望する言語の学習をすすんで個人的に受講できるよう設営することにより, 増大し, 多様化する社会要請に応えることをめざします。

電算機室

本研究所の電算機室では、1978年にメインフレーム・コンピュータを導入して以来、何代かの世代交代を経て、現在は HITAC M-640 システムが主機となっています。このシステムは、アジア・アフリカの言語を対象にした自然言語処理の目的に沿って、構成されています。たとえば、非ラテン・非漢字系の文字体系を扱うための文字フォントの作成、これらの文字フォントが利用できるエディタによるテキスト入力、画面表示・印刷のための出力、などの処理が可能です。また、ユーザーの研究目的に応じて、インデックスの作成や辞典編纂、データベースの編成、テキスト分析などのための各種ユーティリティー・ソフトウェアが準備されています。



情報資源利用研究センター

現在は、1997年4月より本研究所に情報資源利用研究センターが設置されたことにより、コンピュータ処理の対象が、従来のテキスト中心から、音声・静止画・動画をも含んだマルチメディアに移行しつつあります。センターの目的のひとつは、研究成果の促進や新しい研究手法の開発の基盤整備のために、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源を有機的に統合し構築することです。そして、構築された情報資源をインターネットなどのネットワーク環境で、外部に公開することを目指しています。この目的のために、高性能ワークステーションの導入や、大容量のデータを加工・保存・管理できるハードウェア・ソフトウェアの導入を積極的に進めています。

26-27頁参照



図 書 室

日本における唯一の、大学附置の人文科学系共同利用研究所である本研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語文化に関する研究に必要な基礎資料を、1964（昭和39）年の創設以来収集してきました。

この間、民族の独立、対象地域の複合化、研究手段の高度化等、当該地域に関する研究の諸条件は大きく変化してきました。この現況を考慮しつつ、内外の研究機関、大学等より参集する共同研究員等の需要に応えるため、多様な資料を収集しています。海外研究機関（約50カ国、150機関）との寄贈・交換による資料をも継続的に収集しています。また、本学の教職員、大学院博士後期課程在籍者に対する貸出しや本学の学生およびその他の機関、他大学の教官、学生に対する閲覧サービスもおこなっています。

1999（平成11）年3月末現在、蔵書（備品資料）の総数は91,117冊、マイクロフィルム 9,898リール、マイクロフィッシュ 31,390、雑誌は約1,150タイトル等です。蔵書のなかには、アジア・アフリカ等諸地域の教科書をはじめ、世界各国語の聖書、イランの主要新聞（19世紀末-1970年のマイクロフィルム：65種）、ベンガル語文芸雑誌（19世紀創刊：5種）のほか、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン「エジプト誌：第2版」、19世紀「カイロ石版画集」、晚清（中国）製糖画集、トリビタカ（カンボジア語版・南伝大蔵経）等々、他の研究機関には見られない貴重な資料が所蔵されています。

また外国雑誌の収集には、特に留意し、欠号補充等の努力を続けています。

なお、本研究所には現在、下記5種の文庫があります。

山本文庫：1967（昭和42）年受入

著名な満洲語学者、故山本謙吾氏（1920-1965）の個人蔵書で、満洲語・ツングース語関係の諸文献を中心に言語学・音声学・アルタイ語学等に関する諸文献（和・洋書計598冊）を含む。

浅井文庫：1970（昭和45）年受入

著名なオーストロアジア言語学者、故浅井恵倫氏（1895-1969）の蔵書。アジア・アフリカ諸言語の研究書・辞典類・雑誌等（和・洋書計870冊）をはじめ、高砂族関係の貴重な言語資料、ニューギニアの民族写真その他（アルバム、ノート、原稿、書簡、直筆辞書、単語カード、未発表の高砂族伝説集索引カード等）を含む。

小林文庫：1976（昭和51）年受入

著名なモンゴル史研究者である故小林高四郎氏（1905-1987）の個人蔵書で、モンゴ

ル民族の生活と習俗に関する文献（和・洋書計1,671冊）を含む。

前嶋文庫：1986（昭和61）年受入

わが国におけるイスラム研究の創立者の一人である故前嶋信次氏（1903-1983）の個人蔵書のうち、和漢書1,272冊を受け入れたもの。イスラム関係のみならず、東洋史、東西交渉史、旅行記などを含む。

王文庫：1993（平成5）年受入

著名な台湾言語学者、故王育徳博士（1924-1985）の個人蔵書で、台湾の言語学、文学、歴史、政治関係の諸文献を中心にしたコレクションである。歌仔戲、1950年代から1980年代にかけて日本で展開された台湾独立運動家が発行した雑誌やパンフレット、台湾で発行された党外雑誌や王博士の手稿など貴重なものを多数含む。（和・中・洋書等計3,163点）。

音声学実験室

音声学実験室には、音声言語の性質・特徴や発話の調音状態を観察し記録するために次のような機器が用意されています。

パーソナルコンピュータを用いた音声分析プログラムでは、音声の各時点ごとの構成周波数の変化や強さを濃淡模様で表示するスペクトログラムや基本周波数の抽出ができます。スペクトログラムでは従来の機械式のそれと同様に用途に応じてワイド・バンド、ナロー・バンド、セクション、音圧の表示ができるように、基本周波数を連続的にプロットして表示することもできます。基本周波数測定は測定したい範囲を音声波形上に指定してもできますが、スペクトログラム上の範囲指定もできますので、基本周波数と音節との対応が容易になります。もちろん、各時点ごとの測定値も表示できます。画面の時間表示も自由に変えることができますので、数文にわたるピッチ変化のようなデータも、また音節内のピッチ変化のような詳細な測定を要するようなデータも画面に表示できます。1 サンプルの最大録音時間はサンプリング周波数やコンピュータのメモリーによって異なりますが、現在のシステムでは10kHzを上限とする測定(20kHzサンプリング)のためのデータで最大約10分間可能です。さらに、ある音声データを他の音声データの任意の部分に付加したり、またある音声データからその一部を切り取ったりすることも可能ですし、音声データの特定の部分のみを繰り返し聴取することもできます。

エレクトロ・パラトグラフは、舌の調音運動を観察し記録するための機器です。32個の微小な電極を埋めこんだ人工口蓋を発話者の口蓋にはめて、各時点ごとの電極と舌との接触状態を、前面パネルに口蓋状に配列したランプの点滅で示してくれます。もちろん、この点滅表示を特殊用紙に記録することもできます。

このほかに、ビデオテープ編集機やカセットテープを高速に複製するテープ・デュプリケーターが、フィールド調査で録音されたテープの複製作成や言語研修用テープの作成のために用意されています。また、良好な条件での発話資料を録音するために、防音室や各種のテープレコーダーも用意されています。

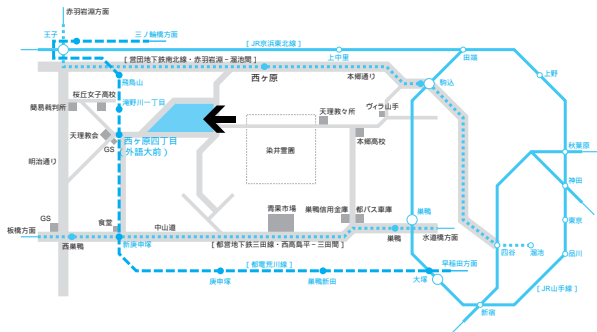
附属施設の音声・言語研修資料室には、フィールド調査で収集された世界の珍しい言語や貴重な民話、民族音楽などのテープやレコードをはじめ、これまでの言語研修テキストのテープ、アジア・アフリカ地域の諸言語の語学テープとレコードが整理・保管されていて、研究者の利用の便を計っています。

アジア・アフリカ言語文化研究所のホームページのお知らせ

本研究所では平成6年度からホームページを開設しています。本研究所の研究会の案内や研究活動の詳細、研究成果の出版物一覧など、最新の情報を提供しています。どうぞご覧ください。

ホームページのアドレス：<http://www.aa.tufs.ac.jp/index-j.html>

交通案内



交通機関

1. 【JR・都電荒川線】利用

JR山手線を大塚駅で下車。都電（荒川線）三ノ輪橋方面行きに乗り換える。
4つ目の西ヶ原四丁目（外語大前）で下車し、踏切を渡る。徒歩約3分。

JR京浜東北線を王子駅で下車。都電（荒川線）早稲田方面行きに乗り換える。3つ目の西ヶ原四丁目（外語大前）で下車し、前方左手へ徒歩約3分。

2. 【地下鉄】利用

都営地下鉄三田線を西巣鴨駅で下車し、徒歩約10分。
営団地下鉄南北線を西ヶ原駅で下車し、徒歩約15分。

3. 【JR】利用

JR山手線を巣鴨駅または駒込駅で下車し、徒歩約15分。
JR京浜東北線を王子駅南口で下車し、徒歩約20分。

アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学

〒114-8580 東京都北区西ヶ原四丁目51番21号

Tel 03-3910-9147(代), Fax 03-5974-3838